

P-163 PCR-RFLP法を用いた習慣流産夫婦間のHLA-DP遺伝子領域の類似性に関する検討

新潟大, 新潟市民病院*

東野昌彦, 倉田 仁, 石井史郎, 風間芳樹,
高桑好一, 田中憲一, 安田雅子*

〔目的〕習慣流産の原因の1つとして習慣流産患者および配偶者間のHLA抗原系の類似性について多くの報告が成されているが、未だ結論が出るに至っていない。今回我々は従来の血清学的あるいは細胞学的には同定が困難であるHLA-DP抗原について polymerase chain reaction-restricted fragment length polymorphism(PCR-RFLP)法を用いて習慣流産患者夫婦間の類似性について検討した。〔方法〕対象は原因不明習慣流産患者15名およびその配偶者であり、流産歴がなく2回以上の分娩歴を有する経産婦人15名およびその配偶者を対照とした。末梢血リンパ球よりphenol-chloroform法にてDNAを抽出しHLA-DP geneのアロ多型性部分である第2エクソンをPCR primer(DB01/DB03)にて選択的に増幅後、5種類の制限酵素(Apa I, Sac I, BstU I, Fok I, Rsa I)により切断、12%polyacrylamide gel上で電気泳動し、その切断パターンよりDP遺伝子型を決定した。

〔成績〕夫婦間のHLA-DP遺伝子型における共通遺伝子型の数は対象群においては0個:6例(40.0%)、1個:8例(53.3%)、判定不能:1例(6.7%)であり、対照群の0個:8例(53.3%)、1個:7例(46.7%)と比較して有意な差は認めなかった。また、対象夫婦における計60遺伝子型の型別頻度と対照群のそれとの間に有意な差は観察されなかった。

〔結論〕習慣流産夫婦間においてHLA-DP遺伝子領域に関し、正常経産夫婦のそれと比較して有意な類似性は認められなかった。既に我々はHLA-DQ遺伝子領域についても同様の報告をしており、習慣流産の原因の1つとして考えられている母児間の免疫不応答はHLA抗原系の類似性によるものではないことが示唆された。

P-164 原因不明習慣流産に対する夫リンパ球注入療法と自己抗体

鹿児島大, 同医療短大*

竹迫俊二, 藤野敏則*, 塩川宏信, 岩元一朗,
白男川邦彦, 永田行博

〔目的〕習慣流産に対する夫リンパ球注入療法(免疫療法)は、高い有効性が報告されてきたが、最近、殊に、外国でその有効性の見直しがされつつある。また、母体への副作用は、臨床的には問題なかったとの報告のみで詳細な検査による検討はされていない。そこで、副作用発現の可能性をみるために免疫療法前後の自己抗体を測定した。〔方法〕原因不明の原発性習慣流産婦人25例を対象に、6種類のIgG及びIgM抗リン脂質抗体(Antiphospholipid antibody, APA)やその他の自己抗体を検査し、それらが陰性の7例に同意の下に非妊時より免疫療法(1回につき 3×10^7 個の単核球を注入)を行い、接種部位の皮内反応が縮小した時点で妊娠を許可した。平均5回の接種を行った。妊娠許可時、妊娠中、分娩後に血中の自己抗体を測定した。APAは、ELISA法にて測定し、吸光度は50例の健康婦人コントロールの平均値からのSDで表し、+3SD以上を陽性とした。〔成績〕全例が正常妊娠経過にて生児を得た。しかし、妊娠許可時には6例でCardiolipin(CL), Phosphatidyl glycerol(PG), Phosphatidyl inositol(PI)に対するIgG分画APA(平均吸光度=+4.1SD)及びPG, PIに対するIgM分画APA(平均吸光度=+5.6SD)が出現した。また、2例に抗核抗体(ANA)の陽性化がみられた。IgG分画APAは分娩時はすべて陰性化したが、IgM分画APAは6例で陽性(平均吸光度=+5.8SD)であった。さらに、ANAは2例で分娩後1ヶ月でも陽性($\times 10, \times 40$)を持続した。抗ENA抗体も1例で陽性であった。〔結論〕免疫療法は有効であるが、母体への副作用としての自己抗体陽性化の可能性が示唆された。この点について、母体側の長期的follow upが必要と思われる。